

序にかえて

— 漱石の俳句観 —

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みに

という書き出しで始まる漱石の『草枕』は、漱石自身が俳句的小説と名づけているように、俳句的であり、漱石自身の俳句に対する考えがはっきりした形で述べられている。また自作の俳句十四句も挿入されている。その中の三句を取りあげると

春風や惟然が耳に馬の鈴

思ひ切つて更け行く春の獨りかな

木蓮の花許りなる空を瞻る

などである。

一高(大学予備門)時代に正岡子規と知り合い、子規の影響を受けて句作を始めたが、その俳句は、俳壇でも知られるようになり、その俳句観は、確かなものである。もちろん『草枕』は、ユニークな作品で、従来の小説とは違った技法を用いており、漱石の作品のなかでの失敗作である、という見方もある。

『草枕』は、明治三九年に発表された。ロンドン留学より帰国(明治三六年)後まもなく開始された創作活動の一連の作品、『吾輩は猫である』『坊っちゃん』等にも続くものである。ロンドンから帰国したばかりの漱石の内面世界は、西洋と、日本ないし東洋との葛藤が激しく、『草枕』では、西洋に対する日本の弁護の形を取り、俳句的小説を書きあげたのである。その主題は、「非人情」である。世間的な人情ではなく、俗な人情を離れた非西洋の世界である。そして晩年の「則天去私」へと発展していく境地であることは間違いないであろう。

苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたり人は人の世につきものだ。余も三十年の間それを仕通して、飽き々々した。飽き々々した上に芝居や小説で同じ刺激を繰り返しては大變だ。余が欲する詩はそんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ちになれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少からう。どこ迄も世間を出る事が出来ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脱する事を知らぬ。どこ迄も同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の

勸工場くわんこうばにあるものだけで用を辨じて居る。いくら詩的になつても地面の上を馳かけあるいて、錢ぜにの勘定を忘れるひまがない。シエレーが雲雀ひばりを聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、ゆうぜんとしてなんざんをみる

悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣りの娘が覗のぞいてる譯わけでもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。

『草枕』は、通常の小説のような筋がない。絵画のように、俳句のように筋がないのである。主人公は、画家であり、旅に出ている。世間的な人情から離れて、自然を観察するのである。人間をもまた、自然のように観察し、解脱した世界に生きようというのである。こうした「非人情」の世界を描くために、主人公の画家に俳句を作らせ、俳句について語らせている。俳句は、「非人情」の世界に入るのに、最も手近なものであり、軽便である。それだけに功德になるのである。

こんな時にどうすれば詩的な立脚地に歸かえれるかと云へば、おのれを感じ、其物を、おのが前に据たまつけて、其感じから一步退いて有體ありていに落ち付いて、他人らしく之を檢査けんする餘よ地さへ作ればいいのである。詩人とは自分の屍骸しかいを、自分で解剖して、其病状を天下に發表する義務を有して居る。其方便は色々あるが一番手近なのは何でも蚊でも手當り次第十七字にまとめて見るのが一番いい。十七字は詩形として尤も輕便けいであるから、顔を洗ふ時にも、かわや

廁かわやに上つた時にも、電車に乗つた時にも、容易に出来る。十七字が容易に出来る出来ると云ふ意味は安直に詩人になれると云ふ意味であつて、詩人になると云ふのは一種の悟りであるから輕便だと云つて侮蔑する必要はない。輕便であればある程功德になるから反つて尊重すべきものと思ふ。まあ一寸腹が立つと假定する。腹が立つた所をすぐに十七字にする。十七字にするときは自分の腹立ちか既に他人に變まじて居る。腹を立つたり、俳句を作つたり、さう一人が同時に働けるものではない。一寸涙をこぼす。此涙を十七字にする。するや否やうれしくなる。涙を十七字に纏まとめた時には、苦しみの涙は自分から遊離して、おれは泣く事の出来る男だと云ふ嬉しさ丈の白分になる。

『草枕』で述べられた漱石の俳句觀を集約すると、俳句をつくることが「解脱」の境地をもたらし、そういう「功德」を俳句はなすということである。俳句における写生や写真ということは、解脱した世界からの觀察であり、出世間的な「非人情」の世界、解脱した境地にあつて、自然をうたいあげることである。俗な人情を離れて、自然の一部のごとく人間をうたうのである。

また俳句が短詩型文学であり、軽便であるということが、解脱した境地へ導くことの可能性を与えてくれ、俳句の功德となるのである。「解脱」と「功德」は、もちろん仏教の世界のことでもあり、漱石が英詩に対して俳句を問題にするときは、西洋のキリスト教に対する東洋の仏教をつ常に念頭に置いたと考えられる。

俳句に禪味あり、西詩に耶蘇味あり、故に俳句は淡白なり。洒落なり。時に出世間なり。西詩は濃厚なり何處迄も人情を離れず。

これは、「ホトトギス」誌上で述べている考えで、『草枕』の発表八年前の明治三十一年のものである。